

シャーキャブッディのアポーハ論解釈の一面について

岡 田 憲 尚

0. はじめに 周知の様に、實在論学派は語の対象として外界に実在する普遍を認める。この實在論学派の主張は「多数にして常住でない外界個物と単一で常住な普遍との関係を明らかにしなければならない」という難点を抱える。ダルマキールティはこの点を追及し、實在論学派の普遍説を論駁する¹⁾。PV I.163ff. ではサーンキヤ学派を対論者として個物と個物に備わる同一性質・普遍の関係が論じられる。そして、PV I.169 の直前の語句に対する註釈に於いて、シャーキャブッディは三種の「他者の排除」を提示する。これは、近年、船山[2000]、桜井[2000]、Dunne[2004]の諸研究によって明らかとされたところである。しかし、これらの研究は PV I.169 に至るまでの議論内容にふれていない様に思われる。従って、本小稿ではこの点を踏まえ、同箇所にあるシャーキャブッディのアポーハ論解釈を再度検討することとした。

1. ダルマキールティのサーンキヤ学派批判— PV I.167cd-168 — PV I.163-169 の議論は大きく分けて二つに分割される。前半(= PV I.163-167c' 及び自註)は「種・地などの諸個物に同一性質が随伴していなければ芽という結果が生み出されることはない」(cf. PV I.163) とするサーンキヤ学派の見解に端を発するもので、ここでは主に因果論が展開される。そして、この議論は PV I.170 以下で再度論じられる。一方、後半(= PV I.167c-169 及び自註)は前半を承けながらも焦点を個物と同一性質・普遍の関係そのものに移す。後半部では諸個物が異なるものである場合に生じる難点、諸個物が異なる場合に生じる難点等が追及される。後半部では先ず次の様に述べられる。

PV I.167'cd: しかし、異なるものには、同時に消滅と生起とがあるであろう²⁾。

PV† (D199a5, P227b3): 相互に異なっていないので、一つのものが消滅する時、同時に全てのものが消滅し、(一つのものが) 生起する時、全てのものが(同時に) 生起するであろう、という意味である³⁾。

これに対して、サーンキヤ学派は諸個物が異なる場合もあるために、すべての個

物が同時に生起・消滅することはないと反論する。しかし、同一性質・普遍 X を持った諸個物 x 群がそれぞれ別々に生起し消滅するのだとすると、個物 x 1 が滅したのに個物 x 2, x3…は存続する事態が起こる。個物 x1 が消滅するにも拘わらず、普遍 X は依然として個物 x2, x3…に存続するため、個物 x1 と普遍 X とは異なると言わざるを得なくなる。これは個物と普遍が異ならないとしたサーンキヤ学派自身の立場に反する。すなわち、個物には消滅があるのに対し普遍は常住であるから、個物と普遍のあいだに異なりを認めなければならない。このことが次の様に述べられる。

PVSV 85,10ff.: 或る一つ (の個物) が消滅している時に、本質として存続しているもの (=普遍)、それは、それ (=個物) の本質 (=本性) ではない。(168bc') (普遍と個物には) 異なりがある⁴⁾。

PVT (D199b6f., P228a6ff.): この様にして、普遍は常住であるからどんな場合でも存続するが、一方、諸個物は (常住で) ない。すなわち、諸個物には消滅がある、と認められている。それゆえ、或る一つの個物が消滅している時に、本質として存続している普遍、それは、その (すなわち) 個物の本性⁵⁾ ではない。矛盾する属性があるから普遍と個物は異なる、という意味である⁶⁾。

次にダルマキールティは、普遍と個物とは別であり、一方が他方に依存することはないため、両者の関係性を述べることもその関係性についての知を持つこともないと述べる。

PVSV 85,17ff.: こ (の理由) から、普遍と異なり (=個物) (には相互に結合を有する) 知はないであろう。(168'cd) それゆえ、これ (=普遍 / 異なりを本質とする実在) は、(異なり / 普遍とは) 別のものであって、(異なり / 普遍に) 依存しない。(何故なら、異なりによって普遍が生ぜしめられることはないからである。/(あるいは、普遍に依存せず、それ故に普遍によって生ぜしめられることはないから)「これ (=異なり) には、この普遍がある」或いは「(普遍には) 異なりがある」と言語表現することは出来ない。

PVT (D200a5ff., P288b6ff.): この理由から⁷⁾、普遍と異なりの知はないであろう。普遍と個物には相互に結合を有する知はないであろう、という意味である。そして、知が存在しないから言語表現は必ず棄却される。⁸⁻⁹⁾ それ (=言語表現) は知を根拠とするからである。まさにこれ故に、自註で⁹⁾、『言語表現することは出来ない』すなわち他ならぬ言語表現の存在しないことが説かれる。それ (=言語表現) の非存在は、知の非存在と不可離だからである。知の非存在についても、間接的に、必ず説かれる⁸⁻¹⁰⁾。

サーンキヤ学派の見解は先の箇所では存在レベルで批判され、ここで言語表現が出来ないことが言われ、知覚レベルでも批難される。すなわち、諸個物同士は異

なりながらも個物と普遍が異ならないとした場合、個物と普遍の両者の結び付きを知ること也不可能になることが示される。

2. サーンキヤ学派の反論に対する回答— PV I.169ab — 上述のダルマキールティの論駁に対し、サーンキヤ学派は「他者の排除」も同じ過失を免れないとの反論を提起する。これに対してダルマキールティは次の様に答える。

PVSV 85,20f. : (個別相としての「他者の排除」について言えば、サーンキヤ学派と) 同じ(過失)はない。何故なら、否定(一般)は無自性であるから(批難されるべきでなく、個別相としての「他者の排除」については)存続・非存続を考えることは(妥当でない)¹¹⁾ (169ab) からである¹²⁾。

PVT (D200b3ff., P229a4ff.) : 『同じ(過失)はない』云々によって斥ける。この場合、他者の排除は三種類ある。(1) 先ず、第一(の他者の排除)は、「ここに於いて¹³⁾ 互いが排除される」と(語義解釈した場合で)、(他者の排除は)他ならぬ排除された個別相である。それについて「(全ての存在物は)自身の性質と他の性質からの¹⁴⁾ 排除を有している」(= PV I.40cd) と仰るのである。そして、こ(の他者の排除=個別相)は、語と証相に依拠する日常行為の拠り所として確立されたものではあるが、語の表示対象として(確立されたものではない)。(2) 第二(の他者の排除)は、「他者を排除すること」と(語義解釈した場合で)、他者の排除一般である。それは、先の論師たちによって、全てのものに対して異ならないものとして確立されたものである。全てのものに対して否定一般は異ならないからである。(3) 第三(の他者の否定)は、「これによって排除される」と(語義解釈した場合で)、分別知に顕現したものである。それを論書の作者は語の表示対象としてお認めになるのである¹⁵⁾。という以上(が意味される)。その(三種の)うち、もし、排除された個別相について(同じ過失が他者の排除にもあると)言われるならば、それは妥当でない。それ(=外界の対境)を本質とするものならば、それが滅すると¹⁶⁾ (個別相としての他者の排除も)必ず滅することになる。(両者は)異ならないからである。しかし一方で、存続している(他の)個別相はそ(の外界の対境)とは必ず別であるものと認められる¹⁷⁾。そして、否定一般は無自性であるから、それ(=否定一般)は批難されるものでない。それを『否定は無自性であるから¹⁸⁾』と述べる。存続・非存続を考えることは(妥当で)ない。或る一つの個物が消滅する時、どうして¹⁹⁾、「他者の排除」が存続するだろうか。むしろ(その時「他者の排除」は)滅するので、この様に存続・非存続を考えることは妥当でない²⁰⁾。

シャーキャブッディはダルマキールティの本文に対し個別相と否定一般の二つの「他者の排除」を配置しながら註釈する。それは次の様に対応していると言える。

I. 『同じ(過失)はない』: 個別相, II. 『否定は無自性であるから』: 否定一般,

III. 『存続・非存続を考えることは(妥当で)ない』: 個別相²¹⁾。ところで、PVS V 85,20f. はアポーハ論がサーンキヤ学派と同様の過失を犯さないことを表明した箇所であり、当然ながら、これに対するシャーキャブッディの註釈も先程に見たサーンキヤ批判と関連していると考えられる。先ず、I は PV I.167cd に関係付けられるだろう。同偈では外界に存在するすべての語の対境が同時に生起・消滅する過失が追及されていた。シャーキャブッディは PV I.40cd を引用し、仏教徒にとって外界の諸個物(すなわち個別相)はそのすべてが同類・異類からの排除を有した独立したものであることを明らかにする²²⁾。そして、その時には、諸個物に同一性質・普遍が備わるとしたサーンキヤ学派と同様の過失はアポーハ論には当て嵌まらないとの旨をシャーキャブッディは示す。III は普遍が常住であるのに個物は滅するという過失を突いた PV I.168bc' と関係付けられるだろう。III に対する註釈では「他者の排除」と個物の消滅が一对一で対応することが論じられる。つまり、「他者の排除」はサーンキヤ学派が普遍に対して認めていた常住性を持っておらず、当該の個物の消滅に即して消滅することが示される。この様にして、シャーキャブッディは外界に想定される「他者の排除」、すなわち、個別相としての「他者の排除」には上記の批判があたらないことを明らかにする²³⁾。

3. 知としての「他者の排除」— PV I.169cd — 先の註釈で列挙された三種の「他者の排除」のうち、知の顕現としての「他者の排除」が続いて次の様に論じられる。

PVS V 85,24f.: そして、(分別知の形象を特質とする「他者の排除」は) 普遍の知 (= 有分別知) の迷乱である。そ(の様に迷乱であることに) よっても、(他者の排除は) 過失を持たない。(169cd) 実に、これ (= 分別知) は対境を持たないものに他ならず、誤まった知である。複数のものに対して同一形象を有するからである。という訳で、それ (= 分別知) の対境 (= 普遍) は存在しないから、(普遍には) 存続あるいは非存続がない。

PVT (D201alff, P229b4ff.): そして、分別知の形象を特質とする「他者の排除」、それは迷乱であり錯乱である普遍の知すなわち有分別知である。それゆえ、むしろ、そ(の「他者の排除」)も(外界に)存在しない。そうであるからというそのことによっても(すなわち)迷乱であるという理由によって(も)、その「(他者の) 排除」は過失を持たない。これには前述の過失はない、と複合語分解をする。これは(すなわち)同一形象を有する分別知は、対境を持たないものに他ならない。何故なら、誤まった知だからである。(反論:) どうして、誤まった(知)に他ならないのか。(回答:)『複数のものに対して』云々と述べる。何故なら、複数のものに対して同一形象を有するもの、その対境は²⁴⁾、

すなわち、分別知の対境である普遍には、存続あるいは非存続がないからである。(反論:) 何故か。(回答:) 誤まった知のその対境は存在しないからである²⁵⁾。

ここでシャーキャブッディは、普遍の知である「他者の排除」は外界に存在しないこと、従って、普遍が外界に存在した場合に起こるサーンキヤ学派と同様の過失はないことを論じる。仏教徒にとって普遍は外界に存在しない訳であるから、存在しないものについて「存続するか否か」を論じても意味がないことを示しているのだと言えよう²⁶⁾。

4. 結語 まとめれば以下の様になるだろう。個別相としての「他者の排除」: 個別相は自身以外の個別相と同一性質を持たず諸々の個別相が同時に生起・消滅することはない。個物の消滅に即して個別相としての「他者の排除」の消滅がある。知としての「他者の排除」: 知としての「他者の排除」は外界に存在せず存続か非存続かを論じるべきものでない。

〈使用テキストと参考文献〉 TS: *Tattvasaṃgraha* (Śāntarākṣita), see TSP. TSP: *Tattvasaṃgraha-panjikā* (Kamalaśīla), S. D. Shastri (ed.), *Tattvasaṃgraha of ācārya Shāntarākṣita with the commentary 'Panjikā' of shri Kamalashīla* (BBS 1), Varanasi, 1968; E. Krishnamacharya (ed.), *Tattvasaṃgraha of Śāntarākṣita with the commentary of Kamalaśīla* (GOS 30), Baroda, 1926. PV I: *Pramāṇavārttika*, chapter I (Dharmakīrti) : see PVS. PVT: *Pramāṇavārttikaṭīkā* (Śākyabuddhi), D no. 4220, P no. 5718. PVṬMs: *Pramāṇavārttikaṭīkā* (Śākyabuddhi), see Inami [1992]. PVS: *Pramāṇavārttikasvavṛtti* (Dharmakīrti), R. Gnoli (ed.), *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti*, Roma, 1960. PVS(M): *Pramāṇavārttikasvavṛtti* (Dharmakīrti), D. Malvania (ed.), *Svārthānūmānapariccheda by Dharmakīrti*, Varanasi, 1959. PVSṬ: *Pramāṇavārttika(sva)vṛttiṭīkā* (Kārṇakagomin), R. Sāṃkṛtyāyana (ed.), *Kārṇakagomin's Commentary on the Pramāṇavārttikavṛtti of Dharmakīrti*, Kyoto, 1982. PVSṬMs: *Pramāṇavārttika(sva)vṛttiṭīkā* (Kārṇakagomin), Shoren Ihara (ed.), *Sanskrit manuscripts of Kārṇakagomin's Pramāṇavārttika(sva)vṛttiṭīkā*, Patna, Narita, 1998. PVV: *Pramāṇavārttikavṛtti* (Manorathanandin), R. Sāṃkṛtyāyana (ed.), "Dharmakīrti's *Pramāṇavārttika* with a Commentary by Manorathanandin", *Journal of the Bihar and Orissa Research Society* 24/3-26/3, 1938-1940. 赤松 [1980]: 赤松明彦「ダルマキールティのアポーハ論」『哲学研究』540号, 1980. Dunne [2004]: John D. Dunne, *Foundations Dharmakīrti's Philosophy*, Boston, 2004. 船山 [2000]: 船山徹「カマラシーラの直接知覚論における「意による認識」」『哲学研究』569号, 2000. Inami [1992]: M. INAMI, K. MATSUDA and T. TANI, *A Study of the Pramāṇavārttikaṭīkā by Śākyabuddhi, from the National Archives collection, Kathmandu*, 東京, 1992. 梶山 [1983]: 梶山雄一『仏教における存在と知識』, 東京, 1983. 石田 [2005]: 石田尚敬「〈他の排除 (anyāpoha)〉の分類について—Śākyabuddhi と Śāntarākṣita による〈他の排除〉の3分類—」『インド学仏教学研究』12号, 2005. Ota [1981]: Shinkai Ota, "Dharmakīrti's Criticism of Sāṃkhya Theory of Universal A Translation of *Pramāṇavārttika* I and Svavṛtti (Verses 163-180)"

『佐賀龍谷短期大学紀要』27号, 1981. 桜井 [2000]: 桜井良彦「Dharmakīrti, Śākyabuddhi, Śāntarakṣita の Apoha 論」『龍谷大学大学院研究紀要 (人文科学)』22号, 2000. Zwilling [1976]: Leonard Zwilling, *Dharmakīrti on Apoha* (Doctoral thesis, Univ. of Wisconsin-Madison), 1976.

1) Cf. PVṬ (D129b7f., P154a1ff.) ad PVSṬ 58,12; PVṬ (D156a3ff., P181bff.) ad PVSṬ 66,3ff.

2) 以下に挙げる PV 及び PVSṬ の試訳はシャーキャブッディの註釈 (チベット語訳) に依拠した。 3) Cf. PVTMs Ib8. 4) *na sa tasya bhedaḥ* PVSṬ(M) : *na tasya bhedaḥ* PVSṬ. 5) *de ni khyad par de'i rang bzhin* D : *de ni rang bzhin* P. (PVṬ のヴァリエントはプラティーカと解釈に関わるもののみを注記する) 6) Cf. PVTMs Ja4. 7) *rgyu des ni* P : *rgyu de ni* D. 8-8) PVSṬ にはこの箇所 の PVṬ との対応は見られない。代わ

りに, Ślokaṁvārttika, Ākṛti 9 が引用され, 否定される。Cf. PVSṬ 326,26ff. 9) *'grel pa la em.* : *'grel pa las* D,P. 10) Cf. PVTMs Ja7f. 11) *"tvān na sthānāsthāna"* PVSṬ : *"tvān nāsthānāsthāna"* PVSṬ(M). 12) マノーラタナンディンは「他者の排除について存在物と区別されるか区別されないかを考えることは妥当でない」という旨の註釈を施す。Cf. PVV 346,18ff. 13) *'di la em.* : *'di las* D,P. 14) *dn̄gos dag las em.* : *dn̄gos dag la* D,P.

15) Cf. 船山 [2000: 121f., 131f.], 桜井 [2000: 27f., 35ff.], Dunne [2004: 131ff.], 石田 [2005: 87f.,95f.]. 16) *de zhiḡ pa na em.* : *de zhiḡ pa* D,P. 17) 筆者の解釈は Dunne と異なる。Cf. Dunne [2004: 131f.]. 18) *med phyir* P : *med pa'i* D. 19) *ci* D : *cig* P. 20) Cf. PVTMs Jb2ff. なお, PV I.169ab に対する PVSṬ には「他者の排除」の語義解釈を行わず, 「他者の排除」も二種のみを挙げるといった様に PVṬ と文面がかなり異なる。ただし, PVSṬ 114,19ff., 120,26ff. 等に見られる語義解釈はシャーキャブッディのそれと同一である。Cf. 石田 [2005: 95]. 21) III で個別相としての「他者の排除」が論じられたという根拠をダルマキールティ, シャーキャブッディの文言に直接見出すことは出来ない。しかし, 個別相を論じた I に対する理由句 (*yataḥ*) にあたること, また, サーンキヤ学派批判に於いて外界実在としての普遍が論じられていたことを踏まえ, 現段階で筆者はこの様に解釈した。ただし, この様に解釈した場合, PVṬ を「個物が減すると個別相としての「他者の排除」が減する」と読まねばならず, 同語反復であることを免れなくなる。 22) Cf. PVṬ (D56a7ff., P66b3f.) ad PV I.40cd. 23) 否定一般について論じる II は上記のサーンキヤ学派批判の内容と直接関わらない。シャーキャブッディは II に対して「無自性であるから批難されるべきない」と註釈し, II を III の理由句でなく III と並列的な I に対する理由句としている。 24) *de'i yul em.* : *de ni yul* D,P.

25) Cf. PVTMs Jb5f. 26) ちなみに, 他の箇所 でシャーキャブッディは, 知が展開する際, それに対応する外界実在が存在する場合であれ存在しない場合であれ, 知の顕現には実在のあり方が付託されるとの見解を示す。また, この様な知の性格付けは後代の論師にも認められる。Cf. PVṬ (D183a4ff., P209b2ff.) ad PVSṬ 76,26ff., PVTMs Ca7ff.; TS 1189f. & TSP ad cit.; 梶山 [1983: 132f.].

〈キーワード〉 ダルマキールティ, シャーキャブッディ, アポーハ論

(筑波大学大学院)

The Sutra's ideal concept, as seen in from the perspective of the Buddha, is that the whole human life situation, i.e., physical and social matters as well as spiritual ones, can be changed or improved through development of their own awareness and subsequent reformation of their spiritual condition. However, if one takes the compilers of the sutra to be the actual authors of the explanation, the contents of the sutra can be seen as an aggressive criticism of those who hold views opposing those of the followers of this sutra. The correct reading can be grasped through a comprehensive understanding of the entire text.

The final repetition of its admonition to humanity reflects the actual condition of human society during the time of the compilation of the text. The condition is all the same in our modern society. The value and importance of the sutra's perspective is underlined through its premise that human beings possess a basic and essential nature of goodness, and that, through their own actions and attitudes, they can engineer the improvement of themselves and their society.

174. An Aspect of Śākyabuddhi's Interpretation of Apoha theory

Kenshō OKADA

As pointed out by recent studies such as Funayama [2000] etc., Śākyabuddhi, commenting on PVSV ad PV I.169, offers a three-fold interpretation of the word *anyāpoha* or "exclusion of others". However, it remains untouched in what context he presents this interpretation. The aim of this paper is to clarify how Śākyabuddhi's interpretation is connected with the Sāṃkhya school's objection which Dharmakīrti rebuts in PV I.169. In my view, Śākyabuddhi presents the three-fold interpretation of *anyāpoha* for the sake of protection against the Sāṃkhya's objection. In PV I.167'cd ff. Dharmakīrti criticizes the universal which the Sāṃkhya school defines as external, eternal and non-different from individuals. According to Dharmakīrti, the following faults would occur: 1) all individuals arise or disappear simultaneously; 2) if the rebutter doesn't consent to it, the universal must be admitted

as different from individuals; and 3) as the universal and individuals are different, one can never define the relation between the universal and individuals. Against this, the Sāṃkhya school accuses the Apoha theory of committing the same faults. Commenting on Dharmakīrti's reply to this objection, Śākyabuddhi offers his three-fold interpretation, whereby Śākyabuddhi suggests that *anyāpoha*, if considered to consist in an external object or in an internal consciousness, should not be regarded as something perdurable.

175. The *Tridaṇḍi-sūtra* in the *Ārghya-āgama* Manuscript

Kazunobu MATSUDA

In the *Ārghya-āgama* manuscript recently discovered in Gilgit, the *Tridaṇḍi-sūtra* forms the first text of the last section named Śīlaskandhika. Up to now its existence was only known indirectly from quotations such as in the *Abhidharmakośavyākhyā* by Yaśomitra and the *Abhidharmakośaṭīkā Upāikā* by Śamathadeva. However, no sūtra connected with the name Tridaṇḍin is found in Pāli or in Chinese and Tibetan translations. I briefly report on the contents of this new sūtra along with the second text, the *Piṅgalātreyā-sūtra*, which has a similar contents as the *Tridaṇḍi-sūtra*, and on their position in the *Ārghya-āgama* of the Sarvāstivādin Buddhist order. I also point out the similarity in structure of the *Tridaṇḍi-sūtra*, as well as the *Piṅgalātreyā-sūtra*, with two Pāli sūtras, and speculate that they may have derived from a single source.

176. On the “Five Types of Quest” in the *Mūlamadhyamakārikā*

Chiaki OZAWA

The purpose of the *Mūlamadhyamakārikā* is to declare *niḥsvabhāvatā*. For this purpose, Nāgārjuna reveals the opponents' contradictions through various means, and proves *niḥsvabhāvatā*. There are “five types of quest” in his argument. The “five types of quest” adds a denial of difference to the argumentation against wrong views found in Early Buddhism, and leads to